



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第18主日 C年 (2022年7月31日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：コヘレトの言葉 1章2節、2章21—23節

第二朗読：コロサイの信徒への手紙 3章1—5、9—11節

福音朗読：ルカによる福音書 12章13—21節

空の先の…

第一朗読は『コヘレトの言葉』からです。22節の「太陽の下」という言葉に注目してください。新共同訳では「太陽の下」と訳された言葉はヘブライ語で「タハット・ハッシャーメシュ」だそうです。『コヘレトの言葉』の特徴的な表現で29回使われています。「タハット」は「～の下で」を意味する前置詞です。「ハッシャーメシュ」は冠詞(「ハ」)と「太陽」を意味する「シエメシュ」の組み合わせだそうです。

「太陽の下」という表現には、「この世で」とか「この世の価値観において」、あるいは「やみの支配の中で」という意味合いがあると思います。1章3節に「太陽の下、人は労苦するがすべての労苦は何になろう」とあります。ここから、コヘレトと呼ばれるこの書の著者が「太陽の下」ではない世界を知っていることがうかがえます。つまり永遠の世界、あるいは神の支配の視点からこの世を眺めているのです。神の支配から見ているから「太陽の下」で生じることがらを労苦と捉えるのです。もし、神の永遠の支配を知らなければ、コヘレトの言う「何という空しさ」(1章2節)は「ニヒリズム(虚無主義)」になってしまいます。そこにあるのは絶望でしかありません。しかしこの世のやみの世界が「空の空」(「ハヴェール ハヴァーリーム」)であったとしても、「太陽の上」には決して失われることのない永遠のいのちの世界があることを指し示そうとしているのです。

第二朗読ですが、先々週は『コロサイの信徒への手紙』の冒頭にある、いわゆる「キリスト賛歌」から主キリストは宇宙の支配者であり、教会の頭である。そしてキリストのからだである教会は福音をあまねく世界に伝える使命を帯びているとされました。続いて先週の第二朗読では、

洗礼を受けたにもかかわらず信仰を棄てようとするコリントの教会の信徒たちに対して、パウロは「洗礼によって、キリストと共に葬られ、キリストと共に復活させられた」のだと励まします。今日の朗読箇所では、キリストと共にあるいのちの姿についてが述べられています。

福音朗読のたとえ話の最後、20節「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる」を味わってみましょう。

イエスさまのたとえ話は福音書の中にたくさん登場しますが、神さまが直接語りかけてくるのはこのたとえ話だけです。「愚かな者」は原文では「アフローン」ですが、「フローン」に否定を表す接頭辞「ア」がついた言葉です。16節の「豊作だった」(ユーフォレオー)も、19節の「楽しみ」(ユーフライノー)も「フローン」に「良い」を表す「ユー」という接頭辞がついた言葉です。「フローン」とは「横隔膜」の意味です。古代の人は「横隔膜」に知恵や霊が宿ると考えていたようです。

この金持ちにとって「豊作だった」(ユーフォレオー)ことが「楽しみ」(ユーフローン)でした。そして「楽しみ」(ユーフローン)を求めたのに、神さまからいただいたのは「愚かさ」(アフローン)だったのです。

ところで新共同訳は「お前の命は取り上げられる」となっていますが、「取り上げられる」ギリシア語では「要求する、奪う」を表す「アパイトー」の三人称複数形の能動態です。ですから、「命を取り上げる、要求する」人々は、豊かな収穫物のために働いた農民たちと考えることも可能です。

【ちょっとひと言】

今日の福音を「共生」という観点から読めるでしょう。金持ちは「私の」という世界に生き、収穫物を分かちあうことはなかったのです。また第一朗読の2章21節とも関連づけて読めるかもしれません。「労苦した結果を、労苦しなかった者に遺産として与えなければなら」なかったのは小作人たちでした。小作人たちこそ「空しさ」を生きた者たちなのです。その「空しさ」を「楽しみ」(ユーフローン)に変えてくださるのは神さまなのです。